Documentary

アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算８年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、６名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が３名いたことも悲しい事実です。

第七章　同僚の急死

長期休暇で日本に残した家族との団欒を楽しんだ後、戻ってきた深夜のダハラーン国際空港には羊の脂の民族的臭気が漂っており、筆者を憂鬱にさせた。

「お前、日本人かあッ！」

背後から怒声を浴びせかけられて、不意をつかれた筆者は驚いた。

「うん、そうだが。誰ですか、あなた？」

「迎えが来ていないッ！ オイッ、いったいどうなっているんだあ！」

そこには目を血走らせた日本人が明らかに異常を呈しながら吠えまくっていた。アラブの街角であれ空港であれ、困り切って立往生している同胞に時々遭遇することがある。優しい筆者はその都度助けてあげるのだが、何人の日本人を困窮から救ってあげたかは忘れてしまった。しかし、これほど程度のひどい相手に出会ったのは初めてであった。聞けば、ダハラーンに着いたのは丸一日前であり、筆者がやっと目の前に現れた最初の日本人であったらしい。

「そもそも、あなたは誰なんだ。何の仕事で、どこへ行こうとしているんだ？」

自分の名前は言えたものの、入国の目的も受け入れ機関の名前も知らないという。ひどい話だ。あとは筆者が本人になり代わって類推してやるしかなかった。
「今、深夜の二時だぜ。まずはホテルへ行って休まなければ、あなたも困るだろう。明日の朝になったら、行き先は俺が調べてあげるからさあ」
言葉も全く通じない異文化中の異文化で、飲食もままならず不安に過ごした丸一日で、昂じきったストレスに発する精神異常は、優しい言葉をかけたくらいでは治らなかった。
　突っかかり続ける相手をあやしながら、筆者は定宿にしているメリディアンホテルに向かった。休暇に出る際は、カフジからドライブしてきた愛車をホテルに預けていた。深夜の帰路には一晩休息する条件で、時々エンジンをかけさせておけば、一か月半後に戻ってきた時には、直ちに運転できるからだ。
行き先捜索は翌朝にしたかったのだが、相手は部屋まで押しかけてきて、長旅で疲れた筆者を寝かせてはくれなかった。仕方なく、ダンマン地区日本人会会長に深夜電話を入れた。
「長松さん。午前三時だというのに申し訳ありません。空港でとんでもない迷子を拾っちゃいましてね。行く先を見つけてやらないと寝かせてくれないんですよ。電気エンジニアらしいんですが、ジュベール辺りの日本企業がらみのプラント工事に呼ばれたコントラクターじゃないかと推察するんですが。
到着は一晩前のキャセイ航空です。ご迷惑でしょうが、大至急受入れ先を調べて貰えませんか？」
ダンマンに駐在する日本人は 40 人もいないから、簡単に招致企業がわかったようだ。返事の電話は 15 分後に掛かって来た。
「その日本人は、ジュベールで伊藤忠が取り纏めている石油化学プラントへ派遣された技術者のようです。現場責任者に駄目じゃないかと文句を言ったら、『あ、いけねえ！忘れてた』だそうです。明朝九時に、引き取りに行かせますから」
エンジニア氏を自分の部屋に押し戻して、やっと筆者は短い眠りについた。

　目覚めた筆者は、カフジの兄貴分である五十嵐に安着と山ほどご馳走を持ち帰ったことを報告するために電話した。休暇を終えた際に、親しい仲間と行ういつもの会合の予告だ。その夜、岡本亭では、恒例の大宴会を開く約束になっており、部屋にたむろする常連メンバー10 人は、帰着を心待ちにしていた。
「五十嵐さん。成田空港で鯖のバッテラ寿司を５本も仕入れてきましたからね。午後３時頃には部屋に戻りますから、みんなを集めておいて下さい」
ところが、五十嵐の返事は予期すらできない衝撃と悲しみを伝えるものだった。
「あのなあ、最悪のニュースなんだ。空港到着は深夜だし、ショックを与えて長

距離ドライブに悪影響が出たら困るので、電話するのを控えてたんだけどな」
「何があったんですか？」
「実は、昨日。山本オジサンが急死したんだ」
「エエッ、嘘でしょう！」
「とにかく、カフジまで戻ってこいよ。話はそれからだ。衝撃を受けたからといっても、運転には十分気を付けてくれよ」
急いで荷物を纏めてロビーに降りた筆者は、昨夜のエンジニア氏と鉢合わせした。地獄に仏の役割を演じてくれた恩人に対して、ムスッとしたまま朝の挨拶もしない相手だった。本来ならば、その礼儀の欠如を怒ってもおかしくない場面ではあったのだが、狼狽した筆者にはどうでも良いことだった。
愛車に飛び乗った筆者は、一路 350 キロ北方を目指して突っ走った。
　到着時間を予想して、筆者の部屋には主だった仲間が待ち構えていた。
ご馳走を山ほど持ち帰る筆者を歓迎するために、その前日の朝、釣り仲間たちは沖合７マイルにある海上構築物の釣り場を目指した。新鮮なアラビア湾の海の幸も加えて盛大に宴会を催そうといういつものパターンだ。
８月初旬のサウディの夏。その朝は摂氏 50 度を超えて特に炎暑が身に染みた。
港を出てまもなく、山本は不調を訴えて、冷房の効いている船室へ降りていった。
「俺、ちょっと気分が悪くなった・・」
心配して数分後に様子を見に行った仲間は、山本が既に絶命して失禁状態であるのを発見して驚愕した。急遽、港に引き返して、浅野医師を呼んだのだか、いかに名ドクターといえども既に手の施しようもない状態であり死亡が確認され、仲間たちを悲嘆のどん底に突き落とした。死因は脳溢血と診断された。
遺体は、鉱業所のレギュレーションに従って、直ちに冷凍室に安置されていた。

　山本の部屋は音在と同じ単身者寮の同じフロアの筋向いにあった。
ふたりは建設的な意味でのライバル関係にあった。釣りと料理の腕前を競い合い、その結果いつも周囲の仲間たちを喜ばせていた。また、夕食は自炊するふたりだったが、筆者が台所に立っていると、トントンとドアをノックする音がする。
そこには山本が立っていて、ぶっきらぼうに一言。
「岡本ちゃんさあ、牛肉の角煮作ったんだけどさあ、ちょっと食べてみろよ」
これがプロ級の腕前で実に美味い。好敵手の腕自慢半分のいたずらなのだ。
『ざまあ見ろ、驚きやがれ！』と山本はほくそ笑んだ。
筆者もやられっぱなしにはしておかない。その皿にのせるお返しは、筆者特製の酢〆めした鯵の叩きであったり、帝国ホテル謹製のスッポンスープの缶詰であったりしたものだ。
『ざまあ見やがれ、ビックリしろってんだ！』

山ほど持ち帰ったご馳走は、大宴会の食卓を飾るのではなく、山本追悼集会のための食材となってしまった。
「こんな現場じゃ何もしてあげられないが、せめてお通夜をしてやろうぜ」
筆者は引き出しの中から蚊取り線香を探し出した。本物の線香などという縁起でもない物を携えて現場に赴任してくる者はいるはずもない。乾燥しきって水たまりもない砂漠地帯に蚊はほとんどいないが、たまたま筆者は日本よりも大型のアラビア・ゴキブリ退治用にこれを持ちこんでいた。
煙が長い廊下にたなびいて、漂う香りがかけがいのない仲間を失った悲しみを現場の男たちに共感させた。
　わずか 44 歳で急逝した山本は、独特の親分っ気を仲間から愛されていた。魚釣りに関しては、アラビア湾の漁労長と称された筆者やその師匠格の五十嵐とも甲乙つけ難い腕前で、日本人コミュニティでは頼りにされる鮮魚の供給源のひとりだった。ふたりの性格の違いは、筆者が壊した道具でも愛着を持って補修を重ねていつまでも大切に使うのに対して、山本は最新型モデルを追いかけて道具に凝るところにあった。長期休暇で帰国すると、竿やリールから小物に到るまで釣り具店が開業できるほどの各種材料を仕入れてくるのが常だった。
「岡本ちゃん。ヒラマサ狙うんだったらさあ、この新型の針が最高だぜ。ほら、使ってみなよ」
道具道楽の山本は、単身赴任者寮の住人にしては、物持ちの資産家であった。東京に残した夫人のために、これらの遺品はなるべく多額の現金化してあげる必要を感じた筆者は、兄貴分の五十嵐と広野に働きかけて管財人を務めた。
趣旨に賛同した同僚は、山本の部屋に集まった。
「いいですか、皆さん。山本夫人になるべく沢山の現金を贈りたいと思います。必要があってもなくても、オジサンの形見だと思って何か買って帰って下さい」
筆者自身は、売れ残った釣り道具に新品相当の値をつけて、すべてを引き取った。山本が愛用していた釣り用ナイフは、その後も出漁する際、本人を偲ぶために常に筆者のポケットの中にあった。

　筆者が現地駐在した通算八年間には、カフジの現場で５人の日本人の死者が出た。ふたりは交通事故死、三人が病気による急死であった。130 人しか日本人従業員が常駐していない現場での悲しい統計だ。いかにカフジが過酷な環境であったかを物語る数字といえよう。
　航空会社の遺体取り扱い規則に従って、金属製の箱に缶詰にされ貨物扱いで祖国に送還される。数少ないケースだが、死者の社会的立場や組織への貢献への敬意として、特別料金を払い客室最後部の六席に支柱を立ててカーテンを張り巡らしてベッドを設置し、まだ生きていることにして運ぶこともある。

一度、筆者が休暇から現場に戻るフライトで、これの隣席に座ることになった経験があった。コペンハーゲンを終着とするスカンジナビア航空機だったから、仏様はデンマーク人なのだろう。まだ重態ながらも生きていることにしてあるから、規則に従って付添人がひとりいるのだが、筆者が搭乗した成田からクウェイトまでの十八時間の飛行中、アテンドしているスタッフがカーテンを開けて様子を見ることは一度もなく、筆者を暗澹とさせたものだった。
『やれやれ、お隣さんは仏様かよ』



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued